

JCOMM news

日本モビリティ・マネジメント会議ニューズレター

第14回日本モビリティ・マネジメント会議開催報告

去る7月19日、20日の2日間、石川県金沢市石川県立音楽堂にて、第14回日本モビリティ・マネジメント会議が開催されました。発表件数は、口頭発表12編、ポスター発表79編、また、参加者数は約470名の方にご参加いただくことができ、盛況のうちに終了することができました。

皆様のご協力と地元自治体、大学、企業等のご尽力で無事開催することができ、厚くお礼申し上げます。



金沢大学教授 高山純一氏の講演の様子

初日19日午前中の開催地企画では、「これからのライフスタイルとモビリティ」金沢・北陸の取組から考える」というテーマで金沢大学教授の高山純一氏にご講演をいただきました。その後、モビリティ・ジャーナリストの楠田悦子氏の話題提供、さらに、(株)計画情報研究所取締役の米田亮氏のコーディネートのもと、パネルディスカッションが行われました。

高山氏からは、これまで、30〜40年に渡り、交通やまちづくりに関する先進的な取組が行われてきた金沢市の交通政策を振り返り、様々なプロジェクトを策定し、成功体験を得て、改善を繰り返すというマネジメントが今に繋がっているというお話をいただきました。また、楠田氏には、国内外の交通事例に

ついて、ご自身の豊富なご経験を踏まえ、分かりやすくご紹介をいただきました。

オープニングセッションでは、「八・まち・歴史が支える金沢の交通まちづくり」というテーマで金沢市都市政策局交通政策部長鳥倉俊雄氏にご講演をいただきました。鳥倉氏の講演では、金沢のまちの交通の歴史は、概ね、50年ごとに節目があり、大正8年に市内路面電車が開通、その約50年後の昭和42年に廃止、その後、車が交通の主役になってから約50年が経ち、現在モビリティ革命の到来で交通環境が大きく変わろうとしており、MaasやCASEなど、新潮流を注目しつつ交通まちづくりを進めていくといった展望をお話いただきました。また、「富山市のコンパクトシティ政策とライフスタイルの変化」というテーマで富山市元活力都市創造部長（現軌道整備事業安全統括管理官）の高森長仁氏にもご講演をいただきました。高森氏の講演では、富山市のコンパクトシティ戦略の柱をご説明いただき、LRTを中心とした交通ネットワークが市民のライフスタイルを変え、その結果、都市景観の向上、高齢者の健康増進、中心市街地のにぎわい、経済効果の向上などの効果を挙げたことを紹介いただきました。

その後、令和元年度JCOMM賞の授与式では、プロジェクト賞3件、デザイン賞1件、マネジメント賞1件の表彰が行われ、受賞した取組について、1日目の口頭発表において「JCOMM受賞者セッション」として取組

みの紹介がされました。

また、2日目の企画セッションでは、筑波大学名誉教授石田東生氏のコーディネートにより、「MMとMaas:世界や日本の潮流とインストール」というテーマで、(一財)計画計画研究所牧村和彦氏、トヨタ自動車(株)間嶋宏氏、経済産業省製造産業局自動車課石川浩氏、国土交通省総合政策局交通計画課蔵持京治氏をパネリストとしてパネルディスカッションが行われ、世界のMaasの状況や、福岡で実証実験中の「Lay route」の状況やビジョン、今後、国内でのMaas展開等について各パネリストから紹介をいただきました。

ポスターセッションは1日目、2日目ともに実施され、日本各地でのMMの実践的な取組が多数紹介され、参加者の今後のMM実践のヒントになったことと思います。

JCOMM恒例の懇親会も19日のプログラム終了後に開催され、多くの参加者において時間の許す限り熱い交流が行われ、懇親会の後半では、時期開催予定都市を代表して島根大学准教授飯野中央氏より、ご挨拶をいただきました。

なお、発表に用いられた資料はJCOMMのウェブページにて公開されており、是非、ご活用ください。

最後に、令和2年の開催都市は島根県松江市となります。また、多くのみなさまにご参加いただき、再会できることを楽しみにしております。



交流会の様子



ポスターセッションの様子



JCOMM賞授賞式の様子

熊本県内バス・電車無料の日

九州産業交通ホールディングス株式会社

令和元年9月11日に熊本市内の路線バスの主要な交通拠点となっている「熊本交通センター」が「熊本桜町バスターミナル」としてリニューアルしました。

熊本桜町バスターミナルの前身となる熊本交通センターは、昭和44年に熊本県庁跡地に九州の中心部、現在の熊本市中央区桜町に設立され、バスターミナルや大規模ホテル、総合ショッピングセンター、レジャー施設などを完備し、多くの方々に利用されてきました。しかしながら、施設の老朽化や中心市街地の利便性を追求する都市計画の策定に伴い、平成27年より市街地再開発事業として改修を進めてきました。

そして、令和元年9月14日に商業施設「SAKURA MACHI KUMAMOTO」(商業店舗数149店舗、来館予想人数約2500人/日)がオープンしました。同施設に併設する熊本桜町バスターミナルは、国内最大級の29バス(乗降場)が設けられ、熊本市内はもとより、県内外への交通の拠点としての機能あることを期待しています。

熊本市中心市街地は人口の集中や駐車場不足に伴う慢性的な渋滞が社会問題となっています。九州産交グループでは、県内バス事業会社(熊本電気鉄道株式会社、熊本バス株式会社、熊本都市バス株式会社)及び熊本市電を運行する熊本市交通局、電鉄電車を運行する熊本電気鉄道株式会社・鉄道事業部の協力のもと、「SAKURA MACHI KUMAMOTO」ブランドオープンの令和元年9月14日限定で、熊本県内バス・電車無料の日と題し、県内全路線バス・コミュニティバス4099便を含む、市電など県下全域の交通機関を対象に終日無料とする試みを実施いたしました。このような大規模な取り組み

は全国初となります。

今回の取り組みを通じて、公共交通機関の利用が慢性的な渋滞など社会問題解決の一助にもなり得るというメッセージの発信とともに、「SAKURA MACHI KUMAMOTO」への興味喚起また、普段は公共交通に馴染みのない方々の利用機会になることを期待しています。また、ヤフー株式会社の「データフォレスト構想の実証実験」として、トラフィックブレイク株式会社、熊本市、熊本大学のサポート体制のもと、産学官連携で今回の取り組みで得られるビッグデータを分析し、公共交通利用の促進、中心市街地の「賑わい」創出、移動活性化などの視点から今後の社会問題の解決、サービス改善につなげていく予定です。

九州産交グループでは、今回の一連の取り組みをきっかけに、熊本中心市街地が活性化していき、また他地域におけるまちづくりのモデルケースになればと願っています。



SAKURA MACHI KUMAMOTOの全景

熊本交通センター開業当時の全景



高齢運転者心理に着目したモビリティ・マネジメントの展開 〜動機付け冊子紹介〜

国土交通省北海道運輸局交通政策部 計画調整官 樋口康弘

運転を続けて交通事故のリスクをとるか、運転を辞めて不便な生活をとるか、加齢に伴う身体機能の低下はリスクと不便の双方を増大させる要因となります。高齢者が無理な運転に頼らずとも自由な外出ができる社会をつくるためには、高齢運転者に見られる2つの心理を理解する必要があります。

ひとつは【運転への過信】です。北海道運輸局が平成29年度に釧路市で実施した調査では、高齢者の半数以上が「運転に自信がある」と回答しました。特に80歳以上ではその割合は60%を超え、加齢に従って自信が増すという結果になっています。これは他の機関が実施した調査でも同様の結果となっており、これまで事故に遭わなかったから、免許更新検査をクリアしたから、という事実が高齢者に【過信】を与えてしまっているのではないかとされています。【過信】に従うのではなく、自分の技能に見合ったスタイルを選択していくためには、運転技術を適切に測定する機会創出がカギといえます。

もうひとつは【移動手段の喪失不安】です。一部の都市圏を除き、多くの地方部では公共交通が衰退しています。そうした中で免許返納は移動手段の喪失に直結して30年度にかけての免許返納率は、東京都の8.1%に比べて北海道では4.2%と非常に低い状況です。こうした中で重要といえるのは家族による送迎ですが、同居家族がいたとしても必ずしも自由に送迎を頼めるわけではありませぬ。前述の調査では、高齢者の半数近くが「送迎を頼みづらい」と回答しています。一方で、高齢者本人が送迎を頼みづらそうにしていると察している同居家

族は4%未満でした。この認識の違いは、送迎を頼みたたくても頼めない、クルマを手放すことは移動手段の喪失だ、という心理を生み出しているといえます。

これらを踏まえ、北海道運輸局ではクルマ以外の選択肢を考えるための一助として2つの動機付け冊子を作りました。ひとつは「高齢者本人向けの動機付け冊子」です。運転がもつ様々なリスク、公共交通を選ぶメリットを記述しています。もうひとつは「同居家族向けの動機付け冊子」です。高齢者の移動手段を家族ぐるみで考える機会創出に向けたメッセージ等を記述しています。高齢者が無理な運転に頼らずとも自由な外出ができる社会をつくるため、北海道運輸局ではこれらの冊子を活用しながらモビリティ・マネジメントの活動を今後とも継続していきます。

高齢者向け

70歳から考える
かしこいクルマの
使い方

ダウンロードはこちら

ご家族向け

家族で考える
かしこいクルマの
使い方

ダウンロードはこちら

編集後記

いよいよ世界三大スポーツイベントの一つラグビーワールドカップが開催されます。それから2020東京オリンピック・パラリンピックまで1年を切りました。記録も気になりますが、世界中からやってくるたくさんの外国人との交流があったり、お祭りさわぎになったりと日本中がにぎやかになってほしいなあとわくわくしています。交通渋滞など心配もありますがぜひ公共交通を有効に活用してスマートにおもてなしできるといいですね。

株式会社 ケー・シー・エス 金丸 晃大